



昔の新聞が現在について教えてくれること

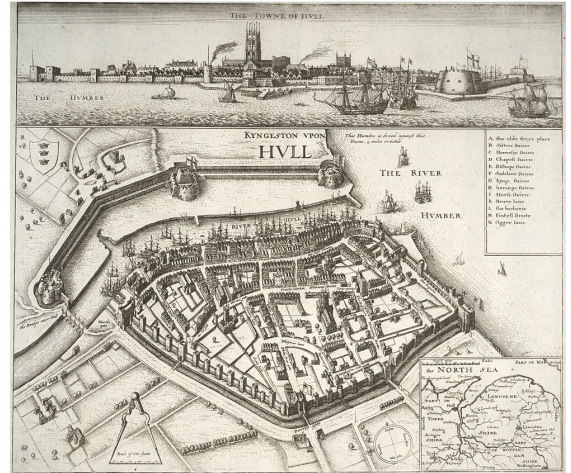
エドワード・ヘイグ（英語教育学）

ニュースに毎日、注意を払っていますか？紙媒体の新聞はどうですか？歴史家にとって新聞は貴重な情報源です。

イギリスの歴史上一番初期の新聞は17世紀半ば、イングランド内戦が始まるわずか数ヶ月前に発刊されました。王の支持者（Cavaliers）と議会の支持者（Roundheads）の間で勃発した戦争は、王が処刑されイギリスが連邦になることで終結しました。

幸い名古屋大学附属図書館にはこの時代の新聞や冊子が多く所蔵されており、他の資料もオンラインでアクセスできます。これらを活用して、一連の事件がどのように報道されたかを研究してきました。

事件はハルという町で1642年に発生しました（図右上、当時の地図）。王がハルに出向いたのは、武器や弾薬の大きな貯蔵所が設置されていたからです。しかし、町は議会によって支配され、ハルの守備隊の長官であるジョン・ホッサム卿（図左下）に王を町に侵入させないよう指示が出されていました。王はホッサム卿を裏切り者と宣言し、次は兵を率いて町の包囲を試みましたが、作戦は失敗。一月後、正式に議会对して宣戦布告しました。



興味深いことに、これら一連の事件は新聞によって対照的な観点から報道されていました。王党派の新聞は王の軍事的成功を強調し失敗を軽視しましたが、議会支持の新聞は逆でした。明らかに新聞は単に「事実」を報告する中立的な観察者ではなく、プロパガンダの一形態でもあったのです。私たちが今日消費する情報はどのようでしょうか？特に私たちはその内容に合意する時、情報発信者が持つ偏見やこだわりが気付かないかもしれません。昔の新聞を研究すると、ニュースに対して批判的な態度を持ち続ける重要性を再認識させられます。

分野・専門紹介—File58

言語学を学ぶとは：一名大生から高校生の皆さんへ

分野・専門名：言語学

「言語学」、「言語を学ぶ」、なるほど面白そうですね！でもどうやって？そもそも大学の勉強って？受験へ向かう皆さんの不安はなかなか尽きないと思います。そこで、今回は名古屋大学文学部の言語学研究室での勉強の様子を少し見てみましょう。一口に言語学と言っても、どの角度から言語を見るかで、その研究は様々です。文法規則のような、文の成り立ちを研究する統語論。「どうしてこの語はこの形？」と、語の成り立ちを研究する形態論。「言葉の意味をどう表そう？」、言葉の意味を何とか表そうとする意味論。「言語といえばやっぱり声でしょ！」という角度から、言語音、声の出し方、伝わり方などを研究する音声学などです。これらの着眼点の違いが各言語の分析の手段となっていきます。また全学基礎科目の授業で学べる言語は英語、ドイツ語、中国語、フランス語、ロシア語、スペイン語、朝鮮・韓国語、イタリア語、ポルトガル語ですが、

言語学の専門科目ではそれ以外の言語も学ぶことができます(例えば私はフィンランド語を勉強しました)。そしてこれらのような授業の中から、卒業のため取らなければならない授業(通称「必修」と、自分の興味が優先の取りたい授業(通称「選択」)を選んで1週間の時間割を作ります。あなたオリジナルの時間割、1週間が始まります。



しかし、注意すべき点もあります。まず言語学についてですが、先述したもの以外にも言語学には多くの分野があります。しかしその全てが授業として開講されているわけではありません。どのような授業が受けられ、どのような勉強ができるのか、事前の確認をお勧めします。また大学生活は、今までより遥かに自由なものとなります。つまりあなたの行動に責任をもてるのは、あなただけということです。これらを自覚した上で、実りある受験期が送れることを祈っています。

(学部4年・町田 浩太郎)

分野・専門紹介—File59

地理学の野外実習

分野・専門名：地理学

大学に入る前まで、私は「地理学」に対して地名や単語の暗記というイメージを強くもっていました。ところが、大学における地理学はそのようなイメージとは大きく異なり、実際に自分の目と耳と足を使いながら自分の興味のある研究テーマを追求していくことができます。

地理学における大きなイベントの一つに、「野外実習」があります。これは学生が自分で研究テーマを設定して、対象地域でさまざまな調査を行ったり、その成果を報告書にまとめたりするものです。研究のテーマはその土地の自然から歴史、文化、経済に関連したあらゆる事象が対象になります。

自分一人でテーマの選定から現地での調査、研究発表、論文執筆まで行うのは簡単なことではありません。市役所の方にアポイントメントを取って聞き取り調査をしたり、慣れないソフトを使用して自分で地図を制作したりと、最初は初めてのことばかりで苦労したことを覚えています。しかし、私はこのことこそが地理学専攻の醍醐味の一つではないかと思っています。地理学では、2年生のうちから野外実習を自分で最後までやり遂げなければなりません。裏を返せば、地理学ではそのような力を早いうちから鍛えることができます。実際に自分の目と耳と足で研究テーマを追求していく経験に加えて、野外実習の過程での試行錯誤は、地理学を専攻したからこそ得られた貴重な経験ではないかと思っています。そしてそのような経験は、きっと卒業後も様々な場面で生きてくるものではないかと思っています。

(学部4年・工藤 美奈)



最近の文学部

別れの季節

本号はこの3月で卒業される学生さんのコラムを掲載しました。お名前を見てびっくり。お二人とも1年生のときに授業等でよくお会いしていた方です。大学生活4年間、長いようであつという間、大きな成長を遂げる大事な時間です。(YK)

*本紙では、名大文学部の多彩な内容を順に紹介していきますが、それまで待てない人は...
名大文学部のWEBサイト <https://www.hum.nagoya-u.ac.jp/> まで(『月刊名大文学部』のバックナンバーもあります)